

福祉系

対人援助職養成の

現場から^④

西川 友理

実習先から、評価表が返ってきた！

実習が終わって、一週間ほど経った頃。
「そろそろ実習先から評価表が返ってきて
いますよー！実習自己評価表をまだ出して
いない人、出さないと、評価面談出来ませ
んよー！」

という、書類や課題の提出が遅れがちな
Aさんやそもそも提出しないことが多いB
君も、慌てて提出しようとしています。

「わー、出すの忘れてた！今日出します出

します！」

「私の評価面談、いつですか？」

毎回これだけ必死に出してくれたら採点
と管理に苦勞しないのに！と思うほど、提
出率のいい課題です。

事前・最中・事後の実習指導

福祉系対人援助所の現場での実習につい
ての授業は、一般的に「〇〇実習指導」と

いう形で実施されます。〇〇には保育とか介護とかソーシャルワークとか、それぞれの資格特有の名前が付きます。養成校によって、科目名は少し違うこともありますが、おおむね「実習指導」という名前で開講されています。

実習指導は、大きく分けて実習前の指導、実習中の指導、実習後の指導があります。このうち、多くの養成校では、実習前の指導にウェイトが置かれていることが多いように感じています。

それは考えてみれば当然で、今まで現場に入った経験がほとんどない学生が、利用者さんの生活の場に入り込むのだから、教員としてはそれなりの知識や技術を持って挑んでほしいと考えるためです。なにより、利用者様の生活に関わる人としての倫理観や最低限のマナーはしっかりと伝えたいところです。それから、実習全体の流れの説明、事務的な書類の作成、具体的な手続きなども説明しなければいけません。それぞれの現場には独特の言葉遣いや手法や文化があるので、ある程度は伝えてリアリティショック（学生が実際の現場を見てショックを受けてしまうこと）を回避する準備も必要です。

せっかく実習させていただくのです。利用者様の生活や権利を侵害するようなことのないように、現場職員の方々のお仕事の邪魔にならないように、そして学生がきちんと意味ある学びが出来るように…。そう考えると、自然と事前指導には力が入ります。学生も、ほぼ未知の世界に飛び込む準備ですから、期待しながら怖がりながら、聞き漏らしたら自分が困る！とばかりに、前のめりで講義を受講します。

そして実習中指導。養成校の教員は、実

習をさせていただいている学生の様子を伺いに、実習先に向かいます。現場職員の皆様からお話を伺い、学生の実習がより良いものになるように一緒に考えます。養成校教員と目が合うと、おやっ！と目を丸くし、笑顔で一礼する学生。実習先で気が張っているためか、顔を見たとたんに緊張が崩れ、泣き出してしまう学生もいます。学生と面談するための場所をお借りし、今まさに学びの現場の真っ最中にある学生に、まずは心身に不調はないか、何か困っていることはないか確かめ、これまでの実習でどのような学びをしたか、今後実習期間終了までに何を目標とするか、短い時間でしっかりと話をします。毎日気を張り目を配り、利用者と職員の間を動き回り、帰宅してからはその日の記録を何時間もかけて書き…多くの学生はエネルギー全開、これ以上ないというほど頑張っている日々の真っ最中です。

そして実習後指導！

さあ、そんな実習が終わりました…。最後まで走り切った学生たち。実習直後は思わず気が抜けてしまいがちです。実は養成校教員もこの時ばかりはホッと一瞬気が抜けてしまいます。特に昨今はコロナのこともあり、実習期間がなんとか終了した瞬間には、心の底から安心してしまいます。

しかし私は、実習指導としてはここからが正念場だと考えています。個々の体験を、学びに昇華させる作業が始まります。

実習で印象に残ったことや勉強になったことを書きだす、実習での一場面を取り上げてプロセスレコードという手法で詳細に

振り返る、皆で実習先での体験を話し合う、実践の中から理論や倫理綱領と繋がっていたところをピックアップする、体験を踏まえて自分になりたい専門職像を描き出す…実習での体験を使って、様々な形で振り返ります。実習はやりっぱなしで終わるのではなく、実習全体を振り返るプロセスがとても重要です。

評価面談とは

さて、冒頭に挙げた評価面談とは、その振り返りの一環として行うものです。

実習が終わると、学生の実習中の学習状況について、実習先からの評価表が返却されてきます。返却されてきた評価表そのものを直接学生に見せることはまずありませんが、教員がそれを見ながら、学生に実習先からの評価を伝え、学生が自分で書いた実習自己評価表と照らし合わせ、一緒に実習について振り返り、今後の学びについて考えます。どの養成校でも実施しているわけでもないようですし、評価面談と言う名前がメジャーというわけでもないのですが、ここでは暫定的にそのように呼ばせていただきます。

実習先の許可を得た上で、実習先が書いて下さった評価表を全て学生に見せている養成校もあると聞いたことがあります。あるいは、実習先に事前に「この部分は学生に見せますので、そのつもりで書いて下さい」という所見を書くコーナーを作り、その部分だけは直接学生に見せている学校もあるようです。

実習自己評価表はその面談の時に使うツールです。自分で書いた自己評価と実習先

から返却された他者評価を比較し、確認することで、自分の実習を振り返ることができます。

私自身は多くても一学年 100 人程度の大学にしか勤務したことがないので、特に変わったことがなければ 1 対 1 の面談はなんとか時間をかければ実施することはできますが、大規模な人数の大学になると、それはそれでまた別の方法をとっているようです。例えば実習担当者ではなく、ゼミ担当が評価面談をしたり、巡回指導教員が面談をしたり等、大学によって方法は工夫されています。

評価面談を受けたがる理由

この評価面談、学生は皆自分がどのような評価をされたのかを怖がりつつも楽しみにしているようで、とにかくほとんどの学生が心待ちにしています。なぜこんなに学生は、評価面談を受けたがるのでしょうか。

それは、学生各々が実習先でこれ以上ないというほど頑張ってくるからではないかと感じています。その努力に対して、きちんと褒められるのではないかと思い、とても楽しみにしているようなのです。

ありがたいことに実習先の先生方は、ほとんどの方がまずは褒めるところや努力したところを評価表の所見欄に書いて下さいます。それを伝えた時の学生の嬉しそうな顔たるや！実習先やその学生の親御さんにお見せしたいほどです。

そして当然ですが、いい評価ばかりではありません。きちんと改善点も書いてきてくださいます。

「ああ、それですね…わかります、確かに

それはうまくいかなかったです」

「それ、私どうしても難しかったです…」
と言いながら、その時の様子を振り返る学生。

「ええっ！私、それに関してはちゃんとや
っていましたよ！」

と言っている学生も、一緒に詳しく状況を
振り返ると、思い当たる節があるようで、

「やっているつもりだったんですが……確
かにちょっと足りなかったかも…」

と、納得していきます。

時には、学生が自分自身で想定している
よりもかなり低い評価で、それを聞いた学
生が涙を浮かべてしまうこともあります。
そのような場合でもおおむね、学生は結果
を受け入れ、次に向けての改善案を一緒に
考えることが出来ます。

納得感のない評価

しかし、ごくまれに学生が評価に対して
納得がいけないような顔をする時もありま
す。

例えば、単純に同じクラスを担当してい
た別の学生と間違えていらっしやるのでは
ないかという内容の評価。それから、当
たり障りのない、「今回の経験を今後の学びに
生かしてください」といった趣旨のみの評
価。そんな時、学生はちょっと失望したよ
うな表情を浮かべます。

学生は、しっかりと自分を「見て」ほし
いのだと思います。評価が良かったか悪か
ったかというより、頑張ったところを見て
くれていた、どうもダメだったところをし
っかり指摘してもらっていた、それで納得

感が生まれるようです。

実際にダメなところを指摘してもらった
評価表に対しては、ショックを受けつつも、
「ちゃんと見てくれてはるんですね…」
と落ち込みながらも、しみじみとつぶやく
学生です。

“最近の若いもん”の真面目で真摯な姿

最近の若いもんは、というような、若者
を低く見るような言い方がありますが、と
んでもない。上記のような様子を見るにつ
け、学生はちゃんと伸びたがっている、成
長したがっている、良く成りたがっている
んだなあという印象を強く持ちます。

万が一、適当にしようとか、まあこれく
らいでいいやろ…といった手抜き感覚で
行った実習だとしても、対人援助のプロの
方々はそれをきちんと「見て」くださり、
そして指摘してくださいます。その指摘に
対して、彼らはまず、

「そうですね……私、甘く見ていたかもし
れませんが…」

と、きちんと痛みを感じます。

いつも本当に、ありがとうございます！

評価表の入った封筒が現場から養成校に
返却されてきます。それを開封するのは実
習担当者です。封を切る時にはいつも緊張
します。所見欄のスペースいっぱいびっ
しりと細かい字で書きこまれた学生への評
価を見ると、本当に胸が熱くなります。言
葉一つ、表現一つに、

「どうすればこの学生に伝わるだろうか」

「どういう表現なら、理解してもらえるだろうか」

「指摘したことを心に留めた上で、次に向かう気持ちで頑張ってもらえるだろうか」と、試行錯誤しながら書いてくださっていることがわかります。

現場のお仕事が忙しい中、この学生をしっかり「見て」くださり、こんなに時間を使ってくださり、思いを持ってくださり、文章にしたためてくださっている。感謝してもしきれません。

それらの思いをきちんと伝えることが、養成校教員の大事な仕事だと考えています。そして、学生にはちゃんとその思いを、受け止める力量があります。

現場と養成校で、専門職として成長しようとする学生をサポートする、というのは、こういうことだろうなと思います。

現場と養成校の連携で、養成する。

多くの養成校で例年開催されている実習懇談会や実習連絡会。養成校が日頃お世話になっている実習先様を招待し、より良い実習について話し合う場です。これについて、多くの養成校では、新型コロナウイルスの影響で、昨年と今年については開催されなかったようです。

何でもそうですが、「残念だけど今年は中止にしましょう」という事が2年も続くと、関わる人達の状況は変化します。現場も養成校も、然りです。そんな中でも、実習生は現場と養成校を行き来します。

先日オンラインで養成校何校かと福祉現場の実習担当者が、実習について話し合う機会がありました。養成校は現場の今の状況を把握しきれていなかったことが分かったり、現場は現場で今の学生達の状況が把握できる機会になったりと、大変有意義な話し合いになりました。

「このところ、実習懇談会がなかったから、こんな話がなかなかできなかったんです。」
「話せてよかった、聞いてよかったです。」
「やっぱり、ちゃんと話し合う機会がないといけないですね。」

と、確認する場になりました。

現場と養成校の有機的な連携があつてこそ、次の福祉現場を担う職員を育てていくことができます。それは、ZOOMなどのデジタルの手段であっても、実習評価表のやり取りというアナログな手段だとしても、何も変わらないことだと思います。

養成校も、福祉現場も、もうWebでの会議やミーティング、研修に慣れてきました。オンラインミーティングで不具合を感じることも、ほとんどなくなってきました。まるでドラえもんに出てくるところでもドアのように、移動時間と電車代を無視して、私たちは顔を見て話が出来ます。コロナ禍がもたらしてくれた、大きな恩恵です。

様々な形での繋がり方を活かして、新たな連携のあり方、それに基づく実習のあり方が考えられると思います。

現場の先生方、今後とも、一緒に実習生を「見て」いきましょう。どうぞよろしくお祈りします！